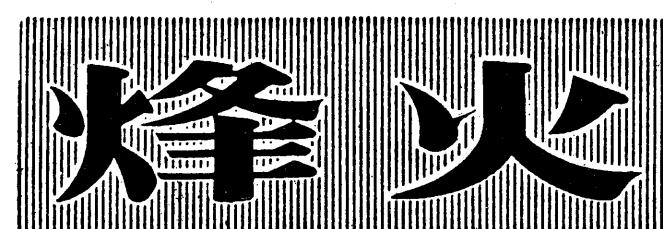


☆帝国主義の侵略反革命を粉碎し全世界の帝国主義を打倒せよ！ スターリン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命—世界プロ独立共産主義を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

1986年
5月25日
第370号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06)371-3706
○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

全国の労働者人民諸君！

日本帝国主義の戦後史を画する

攻撃の風のなかで、わが共産主義者同盟（全国委

）はここ数年、

階級的労働運動

の陣形の建設、大衆的プロレタリア政治統一戦線の建設、そして先進的プロレタリアートの革命の組

共産主義運動と階級闘争の飛躍を

かけたたかいであった。われわれはひきつづきこの事業を全国で

おしそすめる。そしてこのたたかいの前進のなかで、多くの先進的労働者人民の革命党への結集をかちとるであろう。

党的前進なくして階級闘争の前進はない。強固な前衛党建設のための圧倒的カンパを訴える。

共産主義者同盟（全国委）



五・四実行委の旗のもと恵比寿公園での集会と断固たるデモがかちとられた

五月四日、三万人の警察官を動員した首都厳戒体制をぶち破って、東京サミット粉碎中央闘争が、全国労働者政治委員会とプロレタリア行動委員会（準備会）の呼びかけで結成された五・四実行委の主催のもとでかちとられた。右翼日和見主義・急進民主

主義と分岐した革命的政治共闘を建設せよ！を合言葉とした五・四闘争には、全国からもっとも意識的な労働者・学生がこの呼びかけにこたえて結集した。五・四闘争を成功させたこの新しい政治共闘をさらには发展させねばならない。（報告記事は六頁）

五・四サミット闘争に決起

首都に革命的政治共闘の火柱

本号の内容

六月政治闘争基調 (P2~5)

沖縄87攻撃粉碎せよ (P8~11)

東京サミット批判 (P12)

命会議にたいし、プロレタリア国際主義の復権と、武装蜂起一貫にむけた革命的政治闘争の組織化をかかげて、首都における総決

東京を戒厳体制下においておこなわれた東京サミットは何を明らかにしたか。

東京サミットは長大な「経済宣言」を探査したが、それはいかなる意味でも帝国主義諸国が、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国に広がる飢餓や貧困、累積債務国の経済的破綻、原油など第一次産品の暴落に示される過剰生産恐慌への傾斜、貿易不均衡や通貨問題をめぐる帝国主義間対立の激化などのどれひとつに問題にたいしても、根本的解決ができないことを示した。他方で東京サミットは

三つの政治文書において帝国主義列強の団結を誇示し、リビアへの名ざしの批難を含むところの「国際テロリズムに関する声明」を採択した。それは米帝が各國の反帝民族解放闘争への支援をつづけるリビアを、テロへの報復を理由にして爆撃したように、全世界で高揚する反帝民族解放闘争をはじめとした國際階級闘争の鎮圧をねらった反革命宣言にはかならない。

われわれはこのような帝国主義列強の反革命会議にたいし、プロレタリア国際主義の復権と、武装蜂起一貫にむけた革命的政治闘争の組織化をかかげて、首都における総決

全国のたたかう労働者人民諸君！五・四サミット闘争の成功を受けて六月闘争が開始された。南朝鮮人民の英雄的決起にこたえ、プロレタリア政治闘争の壮大な組織化をいまこそ開始しよう。国際主義の旗のもと六月闘争への総力あげたとりくみを！

国際主義と革命的政治闘争の復権がちとつたサミット闘争

東京を戒厳体制下においておこなわれた東京サミットは何を明らかにしたか。

東京サミットは長大な「経済宣言」を探査したが、それはいかなる意味でも帝国主義諸国が、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国に広がる飢餓や貧困、累積債務国の経済的破綻、原油など第一次産品の暴落に示される過剰生産恐慌への傾斜、貿易不均衡や通貨問題をめぐる帝国主義間対立の激化などのどれひとつに問題にたいしても、根本的解決ができないことを示した。他方で東京サミットは

三つの政治文書において帝国主義列強の団結を誇示し、リビアへの名ざしの批難を含むところの「国際テロリズムに関する声明」を採択した。それは米帝が各國の反帝民族解放闘争への支援をつづけるリビアを、テロへの報復を理由にして爆撃したように、全世界で高揚する反帝民族解放闘争をはじめとした國際階級闘争の鎮圧をねらった反革命宣言にはかならない。

われわれはこのようないいはいまだ端

わわれわれのこのようないいはいまだ端

れを反映して、国際連帯を志向するわが国の先進的労働者・学生のなかに、マルクス・レーニン主義の復権と共産主義への結集を求める流動が広がりはじめている。またわが国的新左翼諸党派のマルクス・ブランキズムや市民主義への転落に行きついでいくなかで、日帝にたいする戦闘的闘争や右翼ファシズム運動との激しいたたかいをになう先進的労働者・学生のあいだに、これら新左翼諸党派の転落を批判し、これらにかわる政治を求める志向が生みだされはじめている。

われわれの五・四闘争は、この新たな流動と結びつき、それを発展させていくものとなつた。われわれはプロレタリア国際主義を「民衆連帯」や「人民連帯」におしどめるあらゆる小ブルノミズムの批判と、プロレタリアートの全世界的解放にむけたプロレタリアートの国際的統一と共同行動を呼びかけた。われわれは政策阻止闘争や個別の民主主義闘争の直接延長上に革命を展望したり、あるいは中曾根内閣打倒といいうあいまいなスローガンのもとに階級闘争を固定化するような傾向を批判し、闘争の全過程をとおして労働者・学生のなかに資本主義・帝国主義への批判と共産主義への希望を、そしてブルジョア国家にたいする革命的批判をとおした武装蜂起とプロレタリア独裁への確信を、さらにスターリン主義への批判をとおしたわが国と世界における共産主義の建設への確信を、力強くつくりだしていくたたかいとして組織した。そしてあらゆる労働者・学生活動家の組織を、赤軍とソビエトを準備する革命の組織（武装せる革命の伝導路）へと発展・改組するたたかいとして組織した。すなわち先進的労働者・学生を、プロレタリア政治要求と革命の組織に結集させていく階級形成のたたかいとして、五・四サミット闘争を組織したのである。

6月政治闘争基調

全国でプロレタリア政治統一戦線の建設をおしすすめよ！

南朝鮮の決起に連帯を

反帝国主義を鮮明にし全斗煥

改憲闘争を焦点に高揚する南朝鮮労働者人民のたたかいは、光州蜂起六周年を迎えてい

わわれわれはこのようないいはいまだ端

く示している。

明確になつた政治的分歧

全斗煥が独裁政権の長期的保持をねらつて八〇年一〇月二一日に制定した大統領間接選挙制を、改憲によつて直接選挙制にかえることを要求する改憲闘争は、それ自身反全斗煥闘争であり、本年に入つてから全斗煥独裁政権にたいするたたかいの最大の焦点となつてきた。

全斗煥は「社会の混乱と国家破壊をもたらす野党の行為に対しても断固として対処する方針」でのぞむと表明し、改憲運動にいたして徹底した弾圧を加えてきた。しかしたかの高揚においては、全斗煥は、四月三〇日の与野党三党首会談で、国会で与野党が合意すれば任期中（八八年までの）の改憲に応じる用意があることを示唆した。そのねらいが新民党の懷柔によって改憲闘争を分断し、再び国会内の争いにたたかいを封じこめようとするところにあるのは明らかである。

しかし高揚する労働者・学生のたたかいをこのような懷柔策によって鎮静化することなど絶対にできない。

改憲闘争はこの数ヶ月のあいだに急速に全人民的なたたかいに発展し、戦闘的にたたか

う全国学生総連合（全学連）や民主化運動青年連合（民青連）に牽引されて、大衆的な実力闘争という侧面を強めてきた。新民党の改憲署名は五月三日現在で七〇万人を突破した。

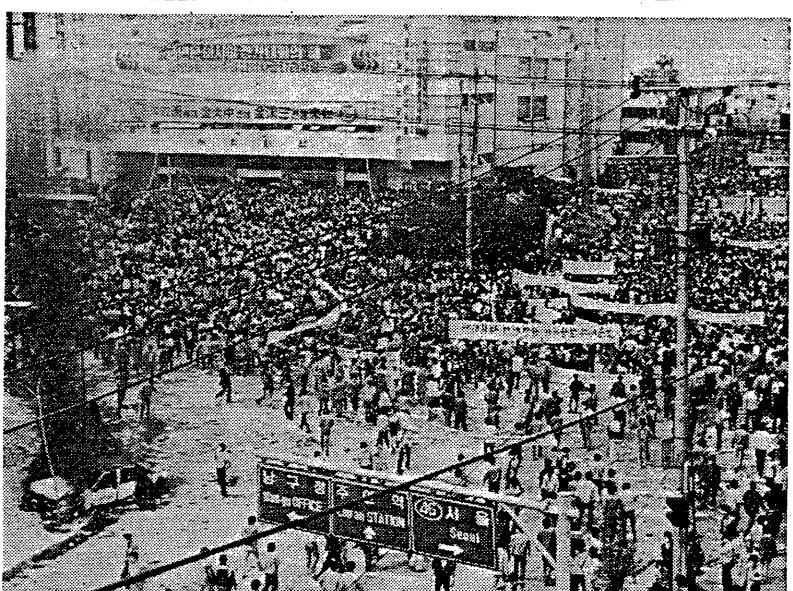
また五月三日、新民党的改憲推進委員会京畿道支部結成大会が予定されていた仁川市には、一〇数万の労働者・学生・市民が結集し、二万人のデモ隊が機動隊との激しい市街戦をたたかひぬいた。この日、全斗煥政権は一人の完全武装した戦闘警察隊と大量の催涙ガス車・装甲車を仁川に投入し、「軍部独裁政権打倒」「米帝は出ていけ」を叫ぶデモ隊においかかり、数百発の催涙弾をうちこんだ。

これにたいし労働者・学生・市民は、路上にバリケードを築き、火炎瓶と投石で応戦し、また与党民正党仁川支部に火炎瓶を投げつけ三階建てのビルを全焼させた。

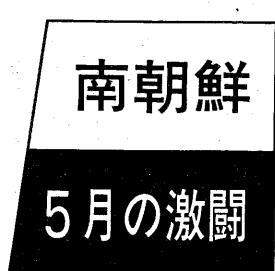
このような闘争の高揚のなかで、全学連や民青連をはじめとした労働者・学生と、新民党的あいだの政治的分歧がいつそう明確になってきた。八〇年の光州蜂起以降、八二年の釜山米文化院焼きうち、八三年の大邱米文化院爆破などの先進的部による反米闘争がつみあげられてきた。そのうえに立ち、全学連は明確にアメリカを帝国主義と規定し、本年に入つてからは「米帝国主義打倒」「米帝は出ていけ」というスローガンを公然とかかげ

た闘争にふみだしてきた。そして改憲闘争のなかに反米帝のたたかいをもちこむとともに、四月下旬以降「米帝国主義の雇い兵用軍事教訓反対」をスローガンに激しい軍事教訓反対闘争を組織している。四月二十五日には成均館大生五〇〇名が建物を占拠し、四月二八日にはソウル大でも五〇〇名の学生がろう城し、金世鎮氏、李載虎氏が軍事教訓に抗議してシンナーをかぶり焼身決起した。

大中氏は新民党的立場を実際上代表して「一部学生の反米路線は支持できない」「焼身自殺などの行為は自制してほしい」と表明し、このかんの学生運動を先頭にした反米帝闘争や実力闘争を「誠に遺憾だ」と批判した。これにたいし五月二日のソウル大の集会では、「韓米関係は伝統的な友好関係ではなく帝国主義と植民地の関係ではないのか」「国軍の最高指揮権が米国にあるのにどうして雇い兵ではないのか」など、新民党への七項目の公開質問状を採択した。また五月三日の仁川における闘争は、たたかいの発展をおしとどめようとする新民党にたいして、先進的労働者・学生が「仁川を解放区にしよう」を合言葉にして、たたかいのひきつづく前進を切りひらくために組織されたという性格を強くもつものであった。この仁川におけるたたかい以



仁川市では10万人の労働者・学生・市民が市街戦を展開(5・3)



光州蜂起6周年を迎えた光州。全斗煥の人形に火をつけ独裁打倒を叫ぶ人たち(5・18)



民衆闘争、自民闘争の学生21人が釜山市のアメリカ文化センターを占拠(5・21)



ソウル大で3000人の学生が学内に入った機動隊と戦闘。この過程で農学部学生李東洙氏が米帝打倒を叫び焼身決起(5・20)

降、先進的労働者・学生は「新民党はめざめよ」「堺国親米の新民党の欺まんを暴露せよ」などの厳しい新民党批判のスローガンをかけ、闘争の発展方向をめぐる公然たる論争にふみだしてきたのである。

共産主義への接近不可避

先進的労働者・学生と新民党的政治的対立が激化していくのは不可避である。

新民党はあくまでも反共親米の枠内における民主化をかかげる政党であり、根本的な社会変革を望まぬ都市中間層に立脚している政党である。他方、民青連や全学連の先進的部は、反共親米の枠にとらわれることなく、光州蜂起以降のいくたの闘争の生き生きとした経験と総括のなかから闘争の路線を発展させ、労働者・農民・都市貧民に依拠しその要求を代表しようとしてきた。

このようないくつかの先進的部分が、南朝鮮を米日帝の植民地と見て反帝民族解放をかかげ、民主主義の実現のみならず労働者・農民・都市貧民の解放に結びつく根本的な社会変革＝共産主義革命に接近していくことは不可避である。そしてこの革命のために、全斗煥独裁政権をそのブルジョア独裁権力としての国家暴力装置もろともに打倒するための、武装闘争を発展させていくことは不可避である。

南朝鮮における労働者・学生のたたかいは全斗煥独裁政権打倒にむけた広範な全人民的性格を保持しながら、反帝民族解放闘争の勝利と根本的な社会変革にむけた階級闘争を力強く発展させはじめたのである。この闘争の新しい段階をもはや新民党が指導できないことは明らかである。新民党にかかる前衛党が建設されねばならない。このかん先進的學生は「反帝反軍部ファッショ民族民主闘争委員会」（民民闘）や「反米自主化反ファッショ民主化闘争委員会」（自民闘）などの政治組織をあつついで結成し、論争をおこなつてきた。これらの動きは、新民党にかかる路線と前衛党の建設をめぐる論争と闘争が発展しつと、そして全世界におけるプロレタリアート・被抑圧民族の解放にむけて眞に力ある国家的役割をはたすこと根本的には要請するものである。

しかしながら我が国の階級闘争は、いまだ共産主義革命から遠くへだてられていて、このへだたりを克服し、共産主義革命にむけた階級闘

中曾根打倒の高揚のなががら

革命的陣形の建設前進させよ

南朝鮮階級闘争の前進は、わが国のプロレタリアート人民に、日帝の新植民地主義を日帝もろとも打倒すること、武装蜂起とプロ独立の樹立をもって共産主義革命にむかうこと、そして全世界におけるプロレタリアート・被抑圧民族の解放にむけて眞に力ある国家的役割をはたすこと根本的には要請するものである。

社共は、この六月の政治的焦点を参議院選（衆参同時選挙）におき、中曾根内閣打倒にむけた選挙闘争に人民を動員しようとしている。また右翼日和見主義党派や市民運動、労

つあることをうかがわせるものである。

皇太子訪韓は、全斗煥政権にテコ入れし、南朝鮮階級闘争の発展をたきつぶし、南朝鮮新植民地主義支配を強化していくうえで、日本帝にとってきわめて重要な位置をもつものである。

皇太子訪韓阻止の準備に全力でとりかからねばならない。そしてこれを政策阻止闘争ではなく、プロレタリア国際主義に立脚したプロレタリア政治闘争として、また日韓闘争を再建していくたかとして組織しなければならない。それはプロレタリアートではなく民衆一般の連帯を主張し、また日本帝国主義の打倒ではなくその新植民地主義的な政策の緩和を要求して、南朝鮮人民との連帯にかえるという没階級的な傾向が日韓連帯闘争において大きな影響力をもっているという否定的現状を、抜本的に変革していく事業と固く結びついたものでなければならない。

われわれが発展させるべき日韓闘争は、第一に、日帝の新植民地主義支配と侵略反革命にたいするたたかいに、できるだけ広範な労働者・学生を組織することをとおして排外主義とたたかい、日韓関係の原則的批判をとおして労働者人民のなかに資本主義・帝国主義の批判をうちこんでいくものでなければならない。第二には、南朝鮮のたたかいが反帝民族解放闘争へ、共産主義革命へ、全斗煥独裁政権を暴力的に打倒する武装闘争へと長期的に発展しつづけていくことに連帯と援助を集めし、このような発展の主体となるプロレタリアートとの国境を越えた共同のたたかいを発展させることであり、このことをとおしてわが国のプロレタリアートのなかに、共産主義革命にたいする確信を形成していくものでなければならぬ。そして第三に、このようないくつかの闘争にたいする態度を次のように提起する。

社共がかりに自民党を過半数割れに追い込み、中曾根内閣を退陣させたとしてもそれによつてできる政府は、資本主義・帝国主義とブルジョア独裁権力には少しも手を触れない改良政府にほかならない。社共の中曾根内閣打倒闘争は、労働者人民のなかに改良政府への幻想をふりまき、たたかいを選挙運動に体する役割りをはたすだけである。

しかし、現在おこっている中曾根政権（内閣）打倒という労働者人民の要求は、社共や一部の新左翼党派がつくりだしたものとのみ一面的にみることはできない。中曾根政権四年間のあいだに、日帝は帝国主義各国が深刻な経済的危機にあえぐなかで、膨大な貿易黒字をためこみ、帝国主義間対立のなかで急速にその位置を上昇させた。それは、アジアを中心とする新植民地主義支配の強化に支えられたものであるとともに、国内労働者人民からの他帝国主義とくらべても例のないほどの厳しい収奪と搾取によってもたらされたものである。またこの四年間のあいだに、中曾根政権は、「戦後政治の総決算」「新国家主義」をかけて侵略反革命の強化、侵略反革

動情報、全国労組などは、六月八日に大阪で、六月一五日には東京で「中曾根たおせ」を中心スローガンとする大衆的な共同行動を予定しており、今春の政治闘争をここへ集約しようとしている。他方、現代急進民主主義も、四・二九闘争、五・四闘争をそれぞれ天皇在位六〇年式典粉碎、中曾根内閣打倒闘争」「東京サミット粉碎、中曾根内閣打倒闘争」としてたたかたよう、中曾根内閣の打倒を一連の政治闘争の集約的な政治目的としてかかげ、中曾根内閣の打倒を日本帝国主義打倒にむけた水路をひらくたかいといいう特別の戦略的位置を与えている。

社共の中曾根政権打倒闘争が、労働者人民をどこにつれていくうとしているのかはあまりにも明らかである。社共は中曾根政権を打倒したあとに、それそれ連合政府を樹立するという。社会党は公明・民社などとの連合政府を展望しているが、それは安保や自衛隊の承認を前提にするものであつて、現在の自民党政府とその政策にくらべても大きな変化のないものである。そればかりか社会党は公明年代をとおして、「日本民族の民族自決権をすら実際に検討している。日共は「非核の政府」をつくれと呼びかけている。日共は七〇年代をとおして、「日本民族の民族自決権を守れ」「日本経済の再建」を唱え、資本主義の打倒ではなくその改良による危機の救済を、日本帝国主義の打倒ではなく米帝からの自立を主張する改良主義・排外主義への純化をおこなってきた。「非核の政府」とは、これら反動的性格はそのままにしながら、「非核」というそれ自身はだれもが反対しないスローガンをかけることで、党勢の拡大をねらうものにすぎない。

日本帝の後を追つて、自民党の一部との連合を、朝鮮労働党との国際党派闘争や在日朝鮮人プロレタリアートとの論争と共同闘争をしておいて、共産主義者（革命的プロレタリアート）がます切りひらいていかねばならない。わが国のプロレタリアートのなかに、共産主義革命にたいする確信を形成していくものでなければならぬ。そして第三に、このようないくつかの闘争にたいする態度を次のように提起する。

命戦争とファシズムの準備を嵐のようにおしすすめた。

S D I 研究への積極的関与と日米安保の強化、軍事費 G N P 一%枠の撤廃と国家安全保障会議設置策動に示される戦争遂行能力の強化、国家秘密法制定策動やサミット戒厳令などの治安弾圧の強化、天皇在位六〇年式典や日の丸・君が代の強制、靖国神社公式参拝の強行などの天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の強化、全斗煥来日などアジアを中心に全世界に新植民地主義支配を拡大しようとする策動。これらはプロレタリア人民の下層を中心にして生きんがため、食わんがためのたたかいを激化させ、戦争とファシズム準備にたいする危機感を広範に生みだし、日帝の侵略反革命や戦争とファシズム準備の政策に反対する労働者、学生のたたかいを広範に生みだしてきました。中曾根政権（内閣）打倒という労働者人民の要求は、これらの危機感やたたかいを背景にして生みだされてきたものである。

スローガン問題について

しかし中曾根内閣打倒というスローガンは、プロレタリアートを失業や生活苦や奴隸労働から解放することと結びつくだろうか。日帝の侵略反革命の強化や戦争とファシズム準備と真にたたかうものだろうか。

そうではない。プロレタリアートの失業や生活苦や奴隸労働は、資本主義そのものがもたらしているのであって、資本主義を打倒し、共産主義社会を建設することによってはじめて解決することができるものである。侵略反革命の強化や戦争とファシズムの準備は、ブルジョアジーがみずから独裁支配を防衛し、帝国主義として生きのびていくためには避けられないものである。しかし中曾根政権（内閣）の打倒というスローガンは、それ自身が資本主義・帝国主義の打倒やブルジョア独裁権力の打倒と直接結びつかなければ決して勝利することはできないものである。

日本帝国主義とそのブルジョア独裁権力を暴力的に打倒し、プロレタリア独裁権力を樹立することと結びつかねば決して勝利することはできないものである。しかし残念ながらわが国の階級闘争は、いまだこのような共産主義革命の時からは遠くへだてられている。それゆえ現在では中曾根政権の打倒は、実際上は自民党内の政権交代やせいぜい野党による連合政府にしか帰結しない。

以上から先進的労働者・学生は、この六月から七月にいたる中曾根政権（内閣）打倒闘



(上)トマホーク極東配備阻止京都総決起集会(84年6月7日)
(下)レーガン来日・訪韓阻止京都総決起集会(83年11月9日)

6・23京労実集会へ

午後6時半

円山野音(予定)

争の高揚のなかで、広範な労働者人民が中曾根打倒をかけてたたかうことを支持しつつ、そのなかで中曾根政権（内閣）打倒のスローガンのもつ限界を説明し、資本主義・帝国主義そのものを打倒しなければならないこと、ブルジョア独裁権力にかわるプロレタリア独裁権力の準備をおこなわねばならないことを訴えていかねばならない。そして共産主義革命のための革命的陣形を、すなわち階級的労働運動の陣形と大衆的プロレタリア政治統一戦線を全国に建設し、そのなかから共産主義前衛党と結合した先進的プロレタリアート・学生の革命の組織・労政を建設していくたかを、着実に前進させていかねばならない。

右翼日和見主義党派は、このような中曾根政権（内閣）打倒のスローガンに関する態度についてあまりにも無自覚である。彼らは日市連や連帯する会の一部俗流市民主義者と結びついて、「中曾根たおせ」のスローガンのもとに労働者人民を動員しようとしている。

彼らは地方によつては政治的立場をうちだす招請状すらつくる形で集会を準備している。しかしすでに見てきたように「中曾根たおせ」というスローガンは、プロレタリアートのみのスローガンではない。自民党の安倍や宮沢が、すなわちブルジョアジーの一派が中曾根政権にかわるブルジョア政権の要求と結びつけて主張しており、公明・民社等が自民党との連合政権の要求と結びつけ、社共が改良政府の要求と結びつけて主張しているスローガンでもある。このようなかで「中曾根たおせ」というスローガンのみをかけ、できるだけ多くの労働者人民を集めようとする政治は、労働者人民をブルジョアジーとともにたたかわん。

これらの批判されるべき動きが横行するなかで、現在の中曾根政権（内閣）打倒闘争の内部から、プロレタリアートの階級的成长をおしすすめ、革命的陣形の前進を切りひらくとするたたかいが各地でとりくまれている。京都労働者実行委は、中曾根政権打倒のたたかいを自民党内の政権交代におわらせるのでなく、労働者階級の権力の樹立にむけた反戦反安保・国際連帯のたたかいの発展をかかげて、六・二三京都総決起集会を予定している。われわれはこれらのたたかいを支持し、全国に大衆的プロレタリア政治統一戦線を建設・強化していく。

や社共の影響から解き放ち、資本主義・帝国主義の批判や共産主義革命にむけたプロレタリア政治要求と結びつけていくことにはいささかもつながらない。われわれはどんなに大衆的な集会であつても、中曾根政権（内閣）打倒のスローガンをプロレタリアートの独自の政策要求と結びつけて組織しなければならない。

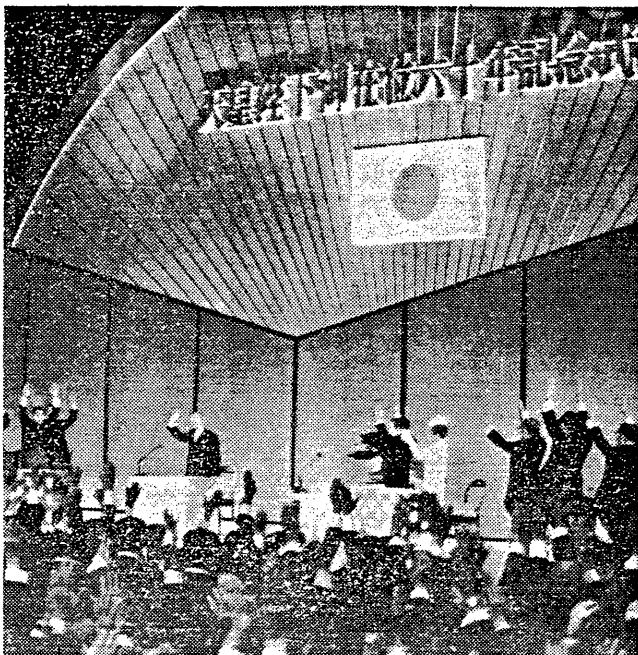
他方、現代急進民主主義派は、中曾根政権の打倒と日帝の打倒を実際に二重写しにしてとりあつい、中曾根政権を武装闘争をもつて打倒することが日帝打倒につながるという特別の意味付与をおこなっている。しかし彼らもまた政権（内閣）の打倒を日帝そのものの打倒とプロレタリア独裁権力の樹立に結びつけるためには、プロレタリアートの階級意識を発展させ、革命的陣形を建設していくための長期にわたる努力が必要であることを明らかにし、ここに結集を呼びかけようとはしない。

5・4

全国労政闘争を牽引

東京サミット粉碎中央闘争

恵比寿公園



侵略にむけて強行された天皇式典
万歳三唱に手をふる天皇(4月29日 国技館)

五月四日、東京サミット粉碎闘争をわれわれは、独自の革命的政治闘争としてたたかいいた。東京恵比寿公園において、東京サミット粉碎中央闘争実行委員会(呼びかけー全国労働者政治委員会、プロレタリア行動委員会(準)主催の集会に、日大(銀ヘル)、京大五・四実行委をはじめ九団体を結集したこのたたかいは、わが国階級闘争、党派闘争のなかに、まったく新たなプロレタリア政治闘争の地平をうちたてた。

このたたかいは、①プロレタリアーの国際的統一を促進するため、わが国階級闘争のなかにプロレタリアー行動委員会(準)主催の集会に、日大(銀ヘル)、京大五・四実行委をはじめ九団体を結集したこのたたかいは、わが国階級闘争、党派闘争のなかに、まったく新たなプロレタリア政治闘争の地平をうちたてた。

前年の厳戒体制が敷かれた四月二十九日、天皇在位六〇年式典がまさにアートの国際的統一を促進するため、わが国階級闘争のなかにプロレタリアー行動委員会(準)主催の集会に、日大(銀ヘル)、京大五・四実行委をはじめ九団体を結集したこのたたかいは、わが国階級闘争、党派闘争のなかに、まったく新たなプロレタリア政治闘争の地平をうちたてた。

このたたかいは、①プロレタリアーの国際的統一を促進するため、わが国階級闘争のなかにプロレタリアー行動委員会(準)主催の集会に、日大(銀ヘル)、京大五・四実行委をはじめ九団体を結集したこのたたかいは、わが国階級闘争、党派闘争のなかに、まったく新たなプロレタリア政治闘争の地平をうちたてた。

前年の厳戒体制が敷かれた四月二十九日、天皇在位六〇年式典がまさにアートの国際的統一を促進するため、わが国階級闘争のなかにプロレタリアー行動委員会(準)主催の集会に、日大(銀ヘル)、京大五・四実行委をはじめ九団体を結集したこのたたかいは、わが国階級闘争、党派闘争のなかに、まったく新たなプロレタリア政治闘争の地平をうちたてた。

前年の厳戒体制が敷かれた四月二十九日、天皇在位六〇年式典がまさにアートの国際的統一を促進するため、わが国階級闘争のなかにプロレタリアー行動委員会(準)主催の集会に、日大(銀ヘル)、京大五・四実行委をはじめ九団体を結集したこのたたかいは、わが国階級闘争、党派闘争のなかに、まったく新たなプロレタリア政治闘争の地平をうちたてた。



機動隊を押ししまくってたたかう5・4実行委(5月4日)

天皇・サミット闘争が高揚

ロレタリア国際主義を復権してゆくこと、②日帝の暴力的打倒とプロ独権力樹立を準備すること、③リア政治闘争を組織すること、④そのための共同行動と論戦を、今日の党派闘争構造を止揚するものとして組織すること、以上の意義をもつものであった。

集会では以上三点を中心とした基調提起について、学生戦線から、京大侵略・差別・戦争とたたかう全学共同行動実行委、日大文理連絡会議(銀ヘル)、阪大有志、京大五・四闘争実行委員会、共産主義学生活動者会議(準)、

同大学戦線の発言がおこなわれ、また八七年天皇訪沖阻止へのたたかいの特別アピール、そして春期政治行動共同実行委、プロレタリア行動委員会(準)、全国労働者政治委員会の諸団体から決意表明が次々におこなわれた。集会後代々木公園までの戦闘的デモを行なわれた。この日、天皇制の強化

丸となつてたたかいぬくことによつて五・四闘争は終了した。

五・四闘争実行委が切りひらいだプロレタリア政治闘争の新しいこの地平は、断固として発展させられねばならない。それは確かに平坦な道ではない。だがわが国階級闘争のなかに、レーニン主義国際主義を荒々しく復権し、わが国の権力問題に正面から回答を与えるプロレタリアートの革命的決起を組織しつけるためには、今日の三里塚分裂に象徴される、わが國派闘争の質を変革する努力を避けてとおれない。

今秋アキヒト訪韓、八七年ヒロヒト訪沖などに示されるブルジョアジーの戦後史を画する攻撃にたいし、プロレタリアートの大衆的政治闘争を組織するとともに、他方でこれを領導する革命的政治決起とその共闘のさらなる組織化をぜひとも発展させねばならない。

4・29 天皇式典粉碎闘争

各地で反対の声

東京

・前面化に反対する先進的労働者人民の集会が、東京、京都など全国各地で開催され、大きな成功をおさめた。

四月二十九日十二時半から東京宮下公園において、天皇在位六〇年式典粉碎総決起集会がおこなわれた。集会には、権力の厳戒体制をうち破つて三千名の労働者・学生市民が結集した。

反天皇制連絡会議の菅孝行氏の基調報告を皮切りに、京都「天皇制を問う」講座実行委員会をはじめとする全国の反天皇戦線の決意表明、各戦線のアピール、そして天皇主義右翼との激しい実力闘争をたたかう山谷争議団をはじめとする実行委参加団体の決意表明が

●「基地の島」—沖縄のたたかう人民と連帯し

天皇訪沖と軍用地二〇年強制 使用狙う八七年攻撃粉碎せよ

「戦後政治の総決算」をかけ、侵略反革命戦争とファシズム準備に奔走する日帝は、沖縄における戦争とファシズム攻撃の新たな段階を刻印する八七年攻撃をうちおろしてきている。米軍用地特措法による土地強奪と、そして沖縄國体をとらえての天皇訪沖を一大軸とする八七年攻撃は、軍事要塞としての沖縄のうち固めと、そのもとへの沖縄人民の動員を飛躍的に強化しようとするものにはならない。すなわちそれは侵略反革命前線基地の永久固定化とその安定的維持、さらには戦争への人民動員にむけて沖縄階級闘争の鎮圧と変質を一挙的に、暴力的なさんとするものである。

すべての革命的プロレタリアートは、沖縄—「本土」をつらぬくプロレタリアートの統一したたかいをもって、この八七年攻撃を粉碎し、国際主義で武装した沖縄闘争の大前進をきりひらかねばならない。

沖縄人民を侵略 反革命戦争に

動員する八七年攻撃

八七年攻撃は現在の国際情勢の激動に深く規定されたものとしてかけられてきている。

共産主義へと進撃するニカラグア人民の革命運動、米帝を筆頭とする国際帝国主義にたいするリビアなどアラブ人民の反帝闘争、マルコス独裁政権を打倒しさらなる前進をつづけるフィリピン革命、黒人プロレタリアートを先頭に持続する南アフリカの反アパルトヘイトのたたかい、改憲運動を軸に新たな高揚と質的発展を示す南朝鮮階級闘争。このようないくつかの階級闘争が、八七年攻撃の軸となる。一方で、帝國主義間対立のなかで、今日、帝國主義の世界支配はかつてない深刻な危機にたきこまれている。そしてこの危機を何とか回避しようと、ブルジョアジーは唯一の延命策として侵略反革命（戦争）による乗りきりへの絶望的な衝動に、いつそう駆りたてられざるをえないものである。

かかる背景のもとで、日米帝國主義のアジアにたいする戦略的拠点である沖縄基地の重要性がますます増大しているのである。毎年強行されている米韓合同軍事演習IIチーム・スピリットに占める沖縄基地の位置の大きさや、フィリピン二月激動にさいして在沖米軍

地縁関係に圧力をかけて孤立化をはかり、また直接、防衛施設局員が家庭や職場におしかけて桐喝をくりかえすなどの切り崩しがおこなわれてきた。

しかし反戦地主は日帝のさまざまな甘言と桐喝、契約地主との金銭的不平等、そして經濟的困苦をもはねのけ、ただ反戦反基地の固い信念によってのみがんばりぬいてきた。反戦地主が存在するかぎり、帝國主義にとってもやこれ以上の反戦地主の切り崩しが困難であるという事態のなかで、日帝は八七年から二〇年間にわざわざ強制使用という土地強奪攻撃にふみだしたのである。

沖縄戦の清算目論む天皇訪沖

八七年攻撃の軸のひとつは、米軍用地特措法による軍用地の二〇年強制使用攻撃である。これは実質的な土地接収にほかならず、「戦争のためには一坪たりとも土地を渡さない」を合言葉に基地と真っこうからたたかいぬいてきた反戦地主を壊滅せんとする攻撃である。

日帝は七二年の「返還」以来、基地の安定的確保のために、あらゆる手段を駆使した攻撃を軍用地主にかけてきた。軍用地料を大巾に引き上げ、「謝礼金」などの名目のワイロをばらまいて軍用地主を買収し、軍用地に依存して生活する層の育成をおしすすめてきた。そして他方では買収や懷柔を断固として拒否する反戦地主にたいしては、公用地法、地籍明確化法、米軍用地特措法のあいづぐ発動をもって土地を奪いつづけるとともに、血縁・

軍用地の二〇年強制使用攻撃

八七年攻撃はこの侵略反革命の拠点としての沖縄基地を永久に固定化しようとする攻撃であるばかりでなく、燃えあがる東アジアの反帝民族解放闘争をにらんでその即戦力、戦争遂行能力を飛躍的に増強しようとする攻撃であり、そしてこれらを可能にするための沖縄社会の全面的再編、沖縄人民の排外主義的組織化をもくろむ攻撃である。

八七年攻撃はこの侵略反革命の拠点としての沖縄基地を永久に固定化しようとする攻撃であるばかりでなく、燃えあがる東アジアの反帝民族解放闘争をにらんでその即戦力、戦争遂行能力を飛躍的に増強しようとする攻撃であり、そしてこれらを可能にするための沖縄社会の全面的再編、沖縄人民の排外主義的組織化をもくろむ攻撃である。

のねらいをみておこう。

それは第一に天皇の沖縄戦における戦争責任の清算をはかるとするものである。沖縄戦は日本帝国主義によって「國体」(天皇制護持)のための捨て石戦として位置づけられ、全島が戦火につつまれたこの地上戦で全住民の実に三人に一人が殺された。沖縄戦では米軍のみならず、「友軍」であるはずの日本軍によつても多数の沖縄人民が、集団自決を強要され、あるいはスペイの疑いをかけられて虐殺されたのである。天皇は戦後、これらの責任に居直りをつづけたばかりか、からうじて生き残った人々がまつたくの廃墟のなかから「ゼロからの出発」を歩みだそうとしていたその時に、みずからマッカーサーにメッセージを送つて米軍が沖縄を軍事占領しつづけるよう要望するという、沖縄の売り渡しするおこなつたのである。

天皇訪沖によつてこれらの歴史を葬り去り、沖縄人民を欺まん的に慰撫し、責任追求の声を封じ、逆に沖縄戦や天皇の言動を正当化することによって、天皇訪沖を沖縄人民の排外主義的組織化の突破口にしようとした帝はもくろんでいる。これが天皇訪沖の第二のねらいである。沖縄における排外主義の組織化は、ぼう大な数にのぼる沖縄戦遺族に焦点をあて、沖縄戦体験を逆手にとるかたちですすめられている。沖縄戦については「今日私たちがこうして生きているのは犠牲となつた人々のおかげであり、決して犬死ではなかつた」などとこれを美化するような主張が意図的にふりまかれている。またたとえば当初は純粹に犠牲者を悼むために遺族によって自然発生的にはじめられた六・二三慰靈祭が、この数年、日帝・西銘の主導で「英靈」をたたえ侵略戦争を賛美するものへと変質させられてきたという事実もある。

しかしこのような攻撃がほとんど実りない結果に終わっていることは、遺族を大きな対象者として設定した本年の「建国記念式典」や「天皇在位六〇年式典」が、いずれも百名ほどのブルジョアジー・右翼をしか結集していないことに見てとれる。また昨年の文部省



沖縄でも下からのファシズム運動が…(4月29日)

烽火

沖縄における小・中・高での
日の丸・君が代実施状況(%)

	85年卒入学	86年卒業	全国平均84年卒業
日の丸	小	6.9	51.4
君が代	中	6.6	61.3
日の丸	高	0	79.6
君が代	小	0	0.8
君が代	中	0	0.7
君が代	高	0	5.7
			53.3

沖縄の抵抗がいかに強いかは一目瞭然

省調査での「日の丸・君が代」にたいする圧倒的な拒否率という結果にも端的に示されている(八五年の卒入学式では「日の丸・君が代」の実施状況は、前者が小学校で六・九%、中学校で六・六%、高校では〇%、後者は小中高とも〇%であった)。「天皇制反対、自衛隊反対、日の丸・君が代反対」と、日本の国とは思えない状況にある」(本年二月一日、沖縄での建国記念の日奉祝式典における発言)という帝國主義にとっては絶対に許せない現実を、日帝は天皇訪沖によつて一挙的ににくつがえそうとしているのである。

第三のねらいは、国家権力、右翼ファシストを総動員した戒厳体制のもとで、天皇訪沖賛否の「踏み絵」を沖縄のあらゆる社会組織・勢力に迫り、来沖阻止のいつさいの政治決起を制圧して、沖縄労働者人民に受けつがれてきた戦闘性を奪い、沖縄階級闘争の変質をはかることがある。

すでに各地域の婦人会・老人会は組織ごと国体への協力者へと組織され、国体時の宿泊場所・車輛提供者のリストアップなどが開始され、また自治体労働者、教育労働者にたいしては、職務命令をもつてしてでも国体への協力を駆りださんとする攻撃がかけられている。国体への強制的動員はもちろん天皇訪沖の下準備としてあるのであり、沖縄プロレタリアートの中核部隊である官公労への攻撃が必然的に激しくなつてきているのである。

そしてこののような動向と軌を一にして、国体への自衛隊介入工作が活発化してきている。沖縄人民にとって自衛隊とは今日なお沖縄戦において住民を虐殺した日本軍なのであり、当然にも反自衛隊感情は「本土」とは比べようもないほど強い。これを打ち崩すために日帝は「返還」以降、町内会やPTAなどで自衛隊認知を迫る活動を強め、宣撫工作を展開すると同時に、一方では公式行事への自衛隊員の強引な介入をはかつてきた。この数年来、労働者人民の抗議を尻目に成人式への介入がなされ、本年二月には伝統ある地域対抗駅伝への自衛隊員の参加が、大半のチームが抗議不参加するなかで強行された。国体への自衛隊の強行介入は、これらの総仕あげの攻撃と

してかけられようとしている。そしてそれは天皇を前面におしたてた排外主義育成の攻撃の一翼に位置するものである。

八七年攻撃はすでに軍用地強奪のための県収用委員会による公開審理、「日の丸・君が代」の卒入学式における暴力的強制などとして実質的に開始されてきている。これとの断固たたかいのなかから、八七年階級攻防戦に勝利する闘争陣形を築いていくことが求められている。

「復帰」14年の現実と 飛躍のための課題

八七年攻撃の概容を以上見てきたが、それ

は日本帝国主義の沖縄支配の基本的性格を如実にあらわしている。

日帝の「返還」以降の沖縄支配は、かつての米帝(米軍政)支配の骨格をそつくり引きつぐものである。沖縄は、米帝にとって戦後支配体制のアジアにおける軍事的要の一つとして位置しつづけてきた。沖縄は朝鮮・アジアの反帝民族解放・社会主義勢力の前進をうちくだけ直接出撃拠点であった。七二年の沖縄「返還」は、ベトナム戦争における米帝の敗退、日帝の復興とアジアへの再侵略の開始、沖縄での復帰運動に示された反米民族運動の高揚、という三つの要因に動かされておこなわれた日米帝の取り引きの産物であった。「アジア人をしてアジア人とたかわせる」という米帝の新たな戦略のもとで、日帝の沖縄にたいする直接的統治が開始されたが、戦後世界において帝國主義によって与えられた沖縄の位置は何ら変わることなく継承され、沖縄の侵略反革命前線基地は新たに自衛隊を加えてますます強化された。

「返還」から一四年の月日が流れ、そのかんに日帝は米軍政時代を上回る強力な沖縄支配の基盤をつくりあげてきた。米民政府と琉球政府(琉球立法院)にかえて、警察・司法・行政などの国家権力機構の中央集権化がはかられ、日帝の直接支配制度がしかれるともに、「沖縄だけ特別あつかいはしない」とさまざまな権利が剥奪され、たたかいの戦闘的伝統に集中砲火が浴びせられた。さらに基地への従属という沖縄社会のいびつな構造が全社會的なものへとおしひろげられた。

「返還」以降の日帝の沖縄支配確立の過程で、沖縄人民のがんじがらめの政治的経済的従属が進行した。日帝ブルジョアジーは「返

還」後、約七〇〇〇億円を財政援助と称して

沖縄に投下した。一部にはこれをさして「援助や税の减免が既得権になり気楽な輸血経済に（沖縄は）どっぷりつかってしまった」（八一年二月四日付日経新聞）とするいわゆる「沖縄輸血経済論」などの許しがたい主張もおこなわれている。しかし巨額の財政援助をふくむ日帝の「返還」以降の全政策が、沖縄人民の生活をいくらかでもうるおすのではなく、基地の維持・強化へと收れんされ、労働者人民のいっそうの生活破壊をもたらしたことは、何よりも次のような現実が有弁に物語っている。

第一に、林立する CTS（石油備蓄基地）、観光客のうけ入れと銘うて拡大する軍事空港、基地の永久固定化をねらった軍用地強奪など、軍事要塞の島へのうち固めが「返還」以降も着々とおしすすめられた。第二に、産業基盤の脆弱な沖縄の基地依存型の経済構造は基本的に変化せず、むしろ固定化の傾向を強め、公務員をふくめた第三次産業従事者が労働人口の六七%を占め、他方で、六%におよぶ失業者を中心に不安定雇用・半失業者のぼう大な層が生みだされた。県内で就職することが困難なために、高卒者の県外就職率は六七・九%（八四年度）にもばつている。

第三に、「本土からきて本土へ流れるザル経済」と呼ばれるように、観光資本、建設資本をはじめとする「本土」の独占資本は、土地を買い占め環境を破壊し、沖縄人民全体への収奪をほしいままにした。

反社共左派勢力の奮闘が力ギ

「返還」以降一四年をとおしてすすめられてきたかかる沖縄人民への抑圧は、日帝にたいする沖縄プロレタリアート人民の怒りを呼びおこさずにはおかれない。侵略反革命前線基地の島といふ沖縄の現実は、沖縄人民全体をはじめとするたたかいを拡大しつづけている。

全国的に一坪反戦地主会を組織してたたかう反戦地主の闘争、石垣島白保の軍事空港建設阻止闘争、読谷村のグリーン・ベレー配備阻止闘争、あるいは日米帝の軍事演習や基地被害にたいするたたかいなどが、絶えることなくになってきた。

かつて「復帰運動」としてたたかわれた沖縄の反米民族運動の前衛であつた社会党・共産党は、このような情況のなかで、たんに沈黙を守つてたたかわないばかりか、沖縄人民を改良主義・議会主義のもとに組織し、日帝の沖縄支配を支える社会排除主義としての姿をあらわにしている。いまほど日帝の沖縄支配と対決し、沖縄階級闘争の前進をきりひらく、社会にかわる前衛指導部の建設が沖縄プロレタリアートに必要とされている時はない。しかし沖縄における反社共プロレタリアートは、いまだ分散しており、かつてのたたか



立看のなか登校する卒業生（小禄高校）

「日の丸」を代り押しかけた 教育をめぐる政治文入

「返還」から今日にいたる沖縄階級闘争の混迷を反映するものである。

沖縄における反社共左派勢力の否定的現状を生みだしている根拠は、第一に、かつて反米民族運動が成立しえた基盤そのものが崩壊し、米軍政支配から日帝の直接統治への一挙的転換がおこなわれるなかで、それまでの沖縄人民のたたかいが、いったんは挫折し切斷されたこと、第二に、「返還」以後、社会排外主義諸勢力の政党再編や系列化が大きくすみ、沖縄－「本土」間の彼ら流の統合がおこなわれたのにくらべ、革命的プロレタリアートによる沖縄－「本土」のたたかいの統一が大きく立ち遅れたこと、第三に、強化される日帝の沖縄支配にたいし、大衆的な反抗が拡大しながらも、これを領導する階級的路線と組織の建設が遅れ、左派と呼ばれる勢力の一部にも依然として民族主義的傾向が根強く存在していること、以上である。

沖縄階級闘争の前進は日本階級闘争総体にとって重要な課題であり、沖縄－「本土」プロレタリアートは団結し、沖縄階級闘争の混迷せる現状を共同の力でうち破らなければならぬ。

沖縄－「本土」の階級的団結を

異なる道をたどつて形成された沖縄と「本土」のプロレタリアートが、眞の革命的団結を獲得するために、沖縄階級闘争にたいする原則的立場を確立することが必要である。

まず第一に、沖縄は一九世紀後半、日本资本主义（近代統一国家）の形成過程で併合され、また戦後は二七年間にわたつて米軍支配下におかれてきたという特殊な歴史をもち、それゆえ沖縄階級闘争は日帝本国階級闘争とは異なるたたかいの発展過程をへてきたことが確認されなければならない。

沖縄階級闘争は、暴力的併合（一八七九年）

琉球処分）、戦前の日帝による徹底した差別抑圧の前史をへて、戦後、米軍政という異民族支配とのたたかいをとおして発展してきた。沖縄戦という帝国主義戦争の災禍を体験し、朝鮮・アジアへと出撃する米帝の侵略反革命戦争と対峙することによって、沖縄階級闘争が今日直面する課題は、もはや過去のものとなつた民族運動にふたたび回帰することにもちろんあるのではなく、沖縄プロレタリアートの独自の政治理要求を鮮明にし、プロレタリアートの階級的成長を組織することによつてその飛躍をかちとることにある。

沖縄階級闘争は、米帝を恐怖せしめるほど高揚をかつて実現しながらも、反米民族運動の成長のなかで不可避に発生した階級分解（対立）をプロレタリアートの側から領導し、プロレタリアートの独自のたたかいをきりひらくことに敗北してきた。それは沖縄プロレタリアートのたたかいの成長を恐れた帝国主義の、一方における銃剣をふりかざした暴力支配、他方における「祖国復帰」という民族要求の先取りによるプロレタリアートの未成熟な要求の解体という攻撃によるものであつた。

民族要求を逆手にとつてプロレタリアートの要求をたたきつぶす手腕を帝国主義が見せつけたのは、一九六九年二・四ゼネストをめぐる攻防においてであった。二・四ゼネストは「復帰運動」に収約された民族運動を、先頭きってになつてきたプロレタリア人民によって準備された「復帰運動の総括的たたかい」であった。それは教公二法阻止闘争や全軍労ストライキという過去の闘争体験に立脚し、基地機能をマヒさせる基地労働者ストライキと結びついた反基地実力闘争として計画された。「復帰運動」が、米軍政支配からの離脱、日本への復帰という国境・領土問題に収約されるものであつたのにたいし、二・四ゼネストのたたかいは、労働者階級が民族的スローガンから一步離れ、部分的にはあれ軍事基地撤去などの独自のスローガンをかかげはじめるという新しい事態を生みだした。それはB52撤去を直接には要求するものでありながら、ベトナム反戦闘争の具体的形態として、国際連帯をめざす志向すら内包するものであつた。これにたいし日帝は「ゼネストは復帰を遅らせる」を殺し文句に、一方で「経済援助二〇億円上積み」をちらつかせ、他方で「本土」の労働手代（同盟・総評民同）による働きかけをおこなわせ、ゼネストを中止させることに成功した。かつての民族運動の前衛であつ

た人民党・社会党に代表される民族主義者は「復帰」という民族要求を実現するために、帝国主義のいいなりになり、沖縄プロレタリアート人民の前に立ちふさがった。沖縄階級闘争は民族運動の制約を大胆にうち破つて發展していく萌芽をつみとられ、以降の混迷を余儀なくされた。この混迷は沖縄プロレタリアートのみがうち破ることができる。

第三に、沖縄プロレタリアートのたたかいは、沖縄―「本土」プロレタリアートの階級的團結を背景にした時、はじめて大きく前進しうるのであり、沖縄―「本土」プロレタリアートの階級的團結は、沖縄―「本土」間に存在する「民族問題（差別・被差別の關係）」を正面からとりあげ、これにたいする階級的な立場を形成することによってはじめて可能となるということである。

明治維新政府の暴力的併合にはじまる日本（ヤマト）と沖縄の支配・被支配關係は、日本資本主義の確立過程においても残存し、沖縄にたいする日帝の差別支配は現在にいたるまで継続している。日帝の沖縄差別支配は沖縄人民の内部に「反ヤマト意識」「沖縄人意識」を再生産しつづけている。

日本資本主義は琉球民族の固有性（國家・言語・文化）を解体し、琉球民族の同化をおこすすめたが、沖縄にたいする差別支配はむしろ意識的に残し、階級支配のひとつテコとして意識的に強化しつづけたのである。これは戦前も戦後も基本的には変わらず、沖縄と「本土」のプロレタリアートのあいだには帝国主義によって差別・被差別の分断のくさびがうちこまれた。この帝国主義の差別・分断支配と意識的にたたかうことなくして、沖縄―「本土」プロレタリアートの階級的團結をつくりだすことは不可能である。われわれは沖縄プロレタリアートの「本土」プロレタリアートとの共同のたたかいを求める志向を支持し促進し、また沖縄にたいする一片の差別・抑圧をも許さないたかいへの、「本土」プロレタリアートの広範な決起を実現していかねばならない。

われわれは「返還」によつて沖縄問題は基本的に解決し、あとは「本土」との格差を是正していくことが課題として残っているだけだとする社共の見解に反対する。彼らは帝国主義の沖縄差別支配、階級分断支配、すなわち帝国主義の支配の問題をまったく見ようとしていない。われわれは同時に、こうした社共に反発するあまり沖縄支配を植民地支配と同一視し、ここから沖縄民族解放を唱える一部の見解にも反対する。これは沖縄プロレタリアートの当面する任務の設定と根本的な誤りをおかしており、階級闘争の細分化を是とする主張であるからである。

これらはいずれも沖縄―「本土」プロレタリアートの階級的團結を阻害する見解であり、先進的プロレタリアートはこれらとははつきり

りとした一線を画さねばならない。

3 社共と分岐した

レーニン主義党を

八七年攻撃とのたたかいをわれわれは沖縄闘争として組織することである。そしてその主闘争をたくましくしている。そしてその主闘争をかげらされている。このようないくつかの任務をかげて全力でたたかう。

任務の第一は、八七年攻撃とのたたかいを沖縄―「本土」をつらぬくプロレタリア政治闘争として組織することである。

日帝は八七年攻撃をもつて沖縄基地の永久固定化と即戦体制強化をはかり、沖縄人民を侵略反革命戦争へとふたたび動員しようとする野望をたくましくしている。そしてその主要なほこ先は、朝鮮・アジアの反帝民族解放闘争にむけられている。このようないくつかの任務の第一は、八七年攻撃とのたたかいを沖縄―「本土」をつらぬくプロレタリア政治闘争として組織することである。

日帝は八七年攻撃をもつて沖縄基地の永久固定化と即戦体制強化をはかり、沖縄人民を侵略反革命戦争へとふたたび動員しようとする野望をたくましくしている。そしてその主要なほこ先は、朝鮮・アジアの反帝民族解放闘争にむけられている。このようないくつかの任務の第一は、八七年攻撃とのたたかいを沖縄―「本土」をつらぬくプロレタリア政治闘争として組織することである。

他方、「本土」プロレタリアート人民は、沖縄問題はもはや解決された、沖縄闘争はもう終わつたという風潮をうち破つて大衆的決起を組織することが必要である。かつて一九六〇年代における社共を中心とした「民族の悲願」なる沖縄問題の民族主義的把握による運動は、「本土」プロレタリアート人民を沖縄階級闘争の前進課題から遠ざけ、「返還」と同時に「本土」から沖縄闘争を急速に風化させる犯罪的役割りをはたした。日本階級闘争総体の發展をかけて、再度「本土」からプロレタリアートの階級的な沖縄闘争への決起が実現されねばならない。

任務の第二は、社共との鮮明な分岐を組織することである。

すでに社共はたんなる議会主義、改良主義にとどまらず、社会排外主義へと転化し、沖縄においてもプロレタリアートの前進をおしとどめる役目になつてゐる。これとの鮮明な分岐を組織することなくして、沖縄階級闘争の發展をかちることはできない。

沖縄における左派勢力は、住民運動や労働運動の個別の戦場では社共と一線を引いてき

た。しかしその社共批判の多くは「たたかわない革新」という社共の非戦闘性を問題にするという一面的なものであり、また「ヤマト民族主義への屈服」という部分的批判にとどまっており、一部には依然、社共への幻想すら存在しているのである。「平和で豊かな沖縄」を「日本の繁栄」によつて実現するといふ社会排外主義の道を選択した沖縄の社共が、

沖縄階級闘争に積極的な役割りをはたすことにはやはりえない。八七年闘争過程において、沖縄プロレタリアート人民の全体的利益をめぐる社共との本格的分岐が、沖縄においてこそ開始されねばならない。

任務の第三は、沖縄におけるプロレタリアートの陣形建設の第一歩をふみだしていくことである。

沖縄プロレタリアートの当面する主要な任務は、日本帝国主義の打倒であり、沖縄と「本土」をつらぬく单一のプロレタリア独裁の樹立、このもとでの沖縄差別支配の打倒・廃絶である。この長期にわたる革命の事業の成功を準備するため、階級的労働運動の陣形とプロレタリア政治統一戦線を両翼とする革

命の陣形が、沖縄においても力強く建設されはじめなければならない。すでに生命力を失つた沖縄の既成指導部を打倒して先進的プロレタリアートは、政治闘争においても労働運動においても独力でみずから陣形を築くたたかいに着手せねばならない。

任務の第四は、沖縄の地にマルクス・レーニン主義で武装した中央集権非合法党と、これと結びついた先進的プロレタリアートの革命の組織を建設することである。

沖縄における社共にかわる前衛党建設は、この十数年、先進的沖縄青年によつて、さまざまな論争をはらんで追求されてきた。しかしこれらの試みの多くは、日本階級闘争の全體的任務ではなく、沖縄の独自性に立脚して党の建設を展望しようとする致命的限界をもつものであった。その結果それらは、社共にかわる全体性を獲得することなく挫折を余儀なくされた。

われわれはすべての先進的沖縄プロレタリアートに訴える。プロレタリア階級の解放を、資本主義・帝国主義の打倒と全世界的な共産主義の実現として領導する党。赤軍とソビエトを建設し、自國帝国主義を打倒する全国一斉プロレタリアートの武装蜂起とプロレタリア独裁権力の樹立を領導する党。このようなマルクス・レーニン主義で武装した中央集権非合法党を沖縄の地に建設するという事業に総結集することを訴える。

八七年攻撃とのたたかいを以上の任務のもと、沖縄・「本土」プロレタリアートの総力をあげて準備せよ。

× × ×

八七年攻撃とのたたかいを以上の任務のもと、沖縄・「本土」プロレタリアートの総力をあげて準備せよ。

